

3月7日 四旬節第2主日

創 15:5～18 フィリ 3:17～4:1 ルカ 9:28～36

1. ルカ

ペトロ、ヨハネおよびヤコブの三人が、山で主イエスの変容を目撃したという伝承は、私たちが今年も記念しようとしている四旬節から復活節に至る主題への使徒的証言として、今朝の朗読配分の中に置かれています。

旧約の律法と預言者を象徴するモーセとエリヤが栄光に包まれて現れ、イエスと語り合っていました。弟子たちは後になって、自分たちは主イエスの復活と昇天、さらに終末の日の来臨の威光を目撃したことを理解しました(Ⅱペト 1:16-19)。私たちはその使徒たちの証言を今朝聞いているのです。

主の受洗に際して天から聞こえた(ルカ 3:22)のと同じ声が、そのとき再び語りかけました。

v.25 「これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け。」

“苦難の僕”(イザ 53章参照)としての神の子イエスの受難は、神の救済史の出来事であって、それによって神は教会に「尊くすばらしい(神の国の)約束」(Ⅱペト 1:4)を与えてくださいました。福音書を通して語る使徒たちの証言によって、この神の約束を信じる人々は幸いです。

2. 創

v.5 「主は彼を外に連れ出して言われた。“天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。”そして言われた。“あなたの子孫はこのようになる。”」

神がイスラエルの父祖アブラハムに、その子孫の繁栄を約束された物語りは、創世記にくり返し美しく描かれています。主は彼に、あなたの子孫を天の星のように、海辺の砂のように増やそうと語られました(創 14:16, 22:17)。古い時代の契約の儀式の名残りをういて語られるこの伝承の中で、神はアブラハムを深い眠りに落とされ、燃える火となって二つに裂かれた契約のいけにえの間を通り過ぎられました。それはかつてエデンの園で神が、あばら骨の一部で女を造るために人(アダム)を眠らせたのと同じ深い眠りでした。このようにして神は自らアブラハムへの約束を誓われました。神の救済史は全く神の主導の下に、摂理として、恵みとして進んで行くのであって、決して人間は歴史の主人ではないことを明確に主張しつつ、v.6は語られています。

v.6 「アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。」

信仰とは神に対するもの、神の救済の御業への無条件の信頼であることを、十分に理解しなければなりません。この神の救済史の中に、いわばその決定的な頂点のところにおられる神の子イエス・キリストを信じるなら、私たちも義と認められます。

「恵みによって、…… 彼(アブラハム)の信仰に従う者も、確実に約束にあずかれるのです。彼はわた

したちすべての父です。」(ロマ 4:16)

このようにして、私たち異邦人もアブラハムの子孫となりました。

3. フィリ

私たちキリスト者の信仰と希望とは、すべて神にかかっています。

w.20-21 「しかし、わたしたちの本国は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています。キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです。」

私たちは、このような希望によって救われているのですから(ロマ 8:24)、恐れおののきつつ自分の救いを達成するように努め(フィリ 2:12)ましょう。今年も私たちは四旬節の典礼によって、使徒たちの信仰に倣う者となり(v.17)、過越の神秘の祭儀に備えて行きます。 アーメン。

3月14日 四旬節第3主日

出 3:1～15 Iコリ 10:1～12 ルカ 13:1～9

1. ルカ

ここで取り上げられている二つの事件は、現代風に脚色して説明すると、次のようなものであったと考えられます。

ユダヤの総督ピラトの兵士たちは、最近エルサレムの神殿で巡礼者を装っていけにえを捧げていたガリラヤ人のテロリストたちを発見し、全員を殺害した。またエルサレムの水道施設シロアムの塔への破壊活動を行おうとしていたテロリスト18人を、激しく攻撃して全員死亡させた。

“テロリストは世界の敵である”という現代の主張が、当時のローマ世界の為政者にとってもまた生々しい現実であったと、十分に推測されるのです。

我が国のニュース報道が、“死傷者の中に日本人が含まれていたという情報はありません”などと伝えるように、おそらく当時のユダヤでも“ピラトの兵士たちによって殺された人々の中には、テロリスト以外の者は含まれていなかった”というような仕方で、情報は伝えられたものと思われる。

ルカ福音書は、主イエスが人々に悔い改めを宣教された物語りの中で、この二つの事件を取り上げました。近づいている神の国と終末の裁きの切迫を前提として、「言うておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる」(v.5)と教えられた主イエスが、ここには描かれています。

もう十分な年月の間、実を結ぶのを待っていた主人がいちじくの木を切り倒すまでの、最後に残された時が“今”なのだ教えられた主イエスが、福音書を通して私たちに語りかけておられます。

2. Iコリ

使徒パウロは自らの宣教を総括して、次のように語りました。

「神に対する悔い改めと、わたしたちの主イエスに対する信仰とを、ユダヤ人にもギリシア人にも力強く証してきたのです。」(使 20:21)

それは未信者に対する宣教であると同時に、すでに救われた会衆への宣教でもあったことが、今朝のテキストから分かります。単に教会の信者名簿に名を連ねていれば安心なのではなくて、悔い改めと信仰こそが重要であることを、使徒パウロは熱心に語りました。

vv.11-12 「これらのことは前例として彼らに起こったのです。それが書き伝えられているのは、時の終わりに直面しているわたしたちに警告するためなのです。だから、立っていると信じる者は、倒れないように気をつけるがよい。」

私たちは今朝、使徒パウロの警告を聞きながら、救い主イエス・キリストの前に立っています。それは古い物語りの中のナザレのイエスではなくて、私たちのミサの中で祭壇から御自身の肉と血を与えてくださる現在のキリストであります。私たちは今年も四旬節に、この主の過越の神秘を記念する復活の祭儀に備え

て行きます。

3.

悔い改めも信仰も、この主イエス・キリストとその福音に対するものであることが、特別に強調されなければなりません。私たちのキリストは十字架と復活のキリスト(ロマ 8:34)であり、終末の日に生きている者と死んだ者を裁くために来られるキリスト(II テモ 4:1)であります。悔い改めというギリシア語は、向きを変えるという意味ですが、新約聖書はそれをキリストに対して、キリストの福音に対して“向きを変える”という意味で使いました。ですからキリストとは関係のないところで、ただ悪人が心を入れ替えて善人になるということではありません。またキリストの福音が語られ、聞かれていなければ、ただ不信心な者が信心深くなっても、それは聖書が語る悔い改めとは何の関係もないことなのです。

教会の信仰にとって、その対象はキリストの福音であり、父子聖霊なる三位一体の神であることを主張するために、信条が果たしてきた歴史的役割がどんなに大きなものであったかを知るとき、私たちは感激せざるを得ません。「すべて救われたいと願う者は、何よりも公同(カトリック)の信仰を保つことが必要である」と語り始めるアタナシオス信条は、「これが公同(カトリック)の信仰である。これを忠実に確実に信ずる者でなければ、救われることはできないのである」と結ばれています。

4. 出

聖書の物語りは、神の救いの歴史の物語りであることを、現代のキリスト者は再び理解する必要があります。

モーセを遣わしてイスラエルの人々をエジプトから導き出した神は、新しい神ではありませんでした。

v.15 「イスラエルの人々にこう言うがよい。あなたたちの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である主がわたしをあなたたちのもとに遣わされました。」

また、やがてこの事件とともに過去の思い出の中に消えて行ってしまう神でもありませんでした。

v.15 「これこそ、とこしえにわたしの名、これこそ、世々にわたしの呼び名。」

この神が、この終わりの時代に(ヘブ 1:2)、独り子を世にお遣わしになりました(ヨハ 4:9)。それは「独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」(ヨハ 3:16)と聖書は語っています。

実に悔い改めと信仰は、すべての21世紀人にとっての緊急で切実な課題なのです。 アーメン。

3月21日 四旬節第4主日

ヨシュ 5:9～12 IIコリ 5:17～21 ルカ 15:11～32

四旬節の典礼は、洗礼志願者のためにも、また信者のためにも、過越の祭儀への備えをさせることを目指しています。特に信者にとってはすでに受けた洗礼の恵みを深く思い、再確認する期節であるということが出来ます。

1. ルカ

v.24 「この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。」

洗礼の秘跡は、罪人を死から生命へと生き返らせる神の恵みであります。ルカ福音書の中の放蕩息子の譬え話は、この神の恵みの業を見事に描き出しています。使徒パウロはより論理的説得的にこれを解説して、次のように語りました。

「あなたがたは、以前は自分の過ちと罪のために死んでいたのです。……生まれながら神の怒りを受けるべき者でした。しかし、憐れみ豊かな神は、わたしたちをこの上なく愛してくださり、その愛によって、罪のために死んでいたわたしたちをキリストと共に生かし、……あなたがたの救われたのは恵みによるのです……。」(エフェ 2:1-5)

死んでいない者が、どうして生き返るでしょうか。罪人であるという自覚のない者が、どうして悔い改めて救われるでしょうか。

v.21 「息子は言った。“お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。”」

罪とは神に対するものであることを、十分に理解する必要があります。「天」とは神のことですが、この譬え話では「お父さん」もまた、地上で神の代理者の立場に立つ者として描かれているのです。

現代人はすでに久しく“人道上の罪(犯罪)”について語ることは雄弁となり、“神に対する罪(反逆)”ということを実感することからは縁遠い歩みをして来ました。それに対して聖書と教会は、神に対する罪の悔い改めと、救い主イエス・キリストへの信仰(洗礼による救い)を、一貫して語って来たのだし、今も将来も語り続けて行きます。四旬節の典礼は、いわばこの宣教の象徴であると言ってよいでしょう。

この地上の教会の宣教に対する反逆は、その宣教の本来の主体である“神に対する罪(反逆)”であります。「もう息子と呼ばれる資格はありません」という罪の告白を自らのものとする者だけが、本当に洗礼の恵みを深く感謝出来るのです。

2. IIコリ

v.17 「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、

3月28日 四旬節第5主日

イザ 43:16～21 フィリ 3:8～14 ヨハ 8:1～11

1. ヨハ

ヨハネ福音書に最初は含まれていなかったこのテキストが、後になってこの場所に挿入されたのは、8:15以下の「わたしはだれをも裁かない。しかし、もしわたしが裁くとすれば、……」というイエスの言葉の説明にふさわしいと考えられたからかもしれません。

この物語りに登場する女の私生活の詳細を想像することは、聖書が語ろうとしていることとは何の関係もありません。そうではなくて、人々が旧約の律法を引き合いに出してこの女を断罪しようとした点に、物語りの展開の鍵があります。

ここで想定されている旧約の律法とは、申 22:22 以下なのですが、そこで強調されているのは、「あなたはこうして、あなたの中から悪を取り除かねばならない」(申 22:24) でありました。その理由は、「あなたは、あなたの神、主の聖なる民である」(申 7:6) からでありました。しかし人々がこの女をイエスの前に立たせたとき、この旧約の律法は、彼ら自身が主の聖なる民となるためにではなくて、この女一人を非難し断罪するために引用されたのでした。私たち現代のキリスト者も、このような意味での“律法主義”を、体験的によく知っているのではないのでしょうか。

イエスは人々の質問に答えようとされませんでした。「わたしはだれをも裁かない」(8:15) ことを、沈黙によって示されたのでしょう。しかし突然、場面は展開します。

v.7 「しかし、彼らがしつこく問い続けるので、イエスは身を起こして言われた。“あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい。”」

イエスの周りに集まっていた民衆、女を取り囲んでいた糾弾者たちのすべてが、イエスのこの言葉によって断罪されました。「しかし、もしわたしが裁くとすれば、わたしの裁きは真実である。」(8:16)

使徒パウロの非常に明快な説明が、私たちの心に浮かび上がって来ます。「ユダヤ人もギリシア人も皆、罪の下にあるのです。」(ロマ 3:9) 「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっています」(ロマ 3:23)。

そして一人残された女に、主は言われました。「わたしもあなたを罪に定めない。」(v.11)

私たちキリスト者は、聖書で語られている“罪の赦し”を、単なる情状酌量や、まして罪状をうやむやにすること等と混同してはなりません。私たち一人一人はイエス・キリストの贖いによる外は決して解決することの出来ない深い罪の中に陥っていることを、聖書の言葉は教えてくれます。

「わたしの語った言葉が、終わりの日にその者を裁く。」(12:48) 「わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるのでしょうか。」(ロマ 7:24) 「神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。」(3:17) この最後の引用が、ヨハネ福音書の今朝の主題です。

2. イザ

福音は、そして救いは、神の業であって、その民である教会を通して実現することに信頼しましょう。私たちが洗礼の秘跡によって教会という群に加え入れられたのは、キリストの救いを受けるためでありました。救いは決して人間の業ではないことを、従って教会の外には救いがないということ、私たちは今朝イザヤ書から聞かされているのです。(教会憲章 14 参照)

3. ファリ

私たちキリスト者は、自分が信仰者であり続けるために、各種の犠牲を払わなければならないことがあります。しかし、キリストが与えてくださった救いの恵みのダイナミックな富を知ると、使徒パウロのように「それらを塵あくと見なす」(v.8) ようになります。

vv.9-11 「わたしには、律法から生じる自分の義ではなく、キリストへの信仰による義、信仰に基づいて神から与えられる義があります。わたしは、キリストとその復活の力とを知り、その苦しみにあずかって、その死の姿にあやかりながら、何とかして死者の中からの復活に達したいのです。」

このような純粋な信仰的発言を口にするのを、20世紀のキリスト者の多くは躊躇していました。なぜでしょうか。聖伝と聖書によって伝えられて来た使徒たちの宣教を、修正を加えずにそのまま信じ受け入れることは、あたかも教養ある現代人にはふさわしくないことであるかのような風潮が、人々の心を支配していました。恐らくそれは、数世紀に亘る不信仰なキリスト者が築き上げて来た知恵、自らの不信仰を弁護するための逃避の知恵であったことに、私たちは気づく必要があります。

今朝もミサで福音書の日課が朗読されるのは、朗読台に立つ助祭や司祭を通して天上のキリストが自ら私たちに語りかけてくださるからではありませんか。使徒書や旧約聖書の朗読も、その背後に復活のキリストが立っておられるから、私たちへの福音の宣教となるのです。

私たちは「キリスト・イエスに捕らえられている」(v.12) のです。 アーメン。